

医療教育におけるmoodle活用の事例報告および コミュニティ作成の提案

浅田 義和

自治医科大学

Case Study of Moodle in Medical Education and Suggestion of Community for Medical Teachers

Yoshikazu ASADA

Jichi Medical University

あらまし：医療教育におけるeラーニングの活用事例は年々増加している。eラーニングの実践において利用されるLMSは種々のものがあり、オープンソースであるmoodleもその一つである。本発表では筆者の所属大学におけるmoodleを用いた医療教育の実践事例を紹介する他、moodle moot japan（日本ムードル協会における研究会）でも話題として取り上げた、医療系分野におけるユーザが情報交換できるための仕組み作りについて紹介する。

キーワード：医療教育、eラーニング、moodle、ユーザーコミュニティ

1. 序論

医療教育において、moodleを活用した教育実践の事例は年々増加している。2014年2月に開かれたmoodle moot Japan 2014においても、医療分野における演題発表が複数みられた。利用形態としては授業の補完としての課題提示や資料掲載としての利用などが多くみられた。一方、各自の実践している授業や研修での実践事例、あるいはmoodleを運用するうえでの知識共有を行うための仕組み作りはまだ不十分であり、各自がそれぞれに工夫を行って運用しているケースが多い。今後、教育のICT化を進めていくにあたって、実践のベストプラクティスを共有するための枠組作りは必須と言えるだろう。

本論文では、本学におけるmoodleの実践事例紹介と合わせ、moodle mootにおいて提案を行った医療系分野でのユーザーコミュニティについて紹介する。

2. 自治医科大学における実践

事例紹介の1つとして、2013年度における自治医科大学でのmoodle実践例を紹介する。

2.1 概要

現在、自治医科大学においては医学部および医学系大学院において利用を開始しており、看護学部でも利用の検討を進めている。

医学部においては1-3年生に対しては授業の補完としての宿題やレポート課題を、4年生以上では臨床実習に用いる資料掲載を、大学院では講義動画へのリンク掲載をそれぞれ実施し、学習の効率化を図っている。以下では特に1年生に対して行っている授業での利用を中心に、個別に利用事例を紹介する。

2.2 必修：理科総合

2013年度より1年生1学期の選択科目として「理科総合」が開始した。これは物理・化学・生物の3科目を統合したものであり、高校で前述した科目を履修していない学生も含めて理科の基礎知識を身につけることを目的としている。また、普段からの学習習慣を身につけることも目的としており、moodleを利用した小テストの実施をその一環で組み込んでいる。

小テストについては担当教員に対する1時間強の簡単なFDを経て、各教員がmoodleの小テストを作成・実施した。なお、この宿題はあくまで学習を補完するためのものであり、必須とはしなかった。

また、学生の到達度を形成的に評価するための「到達度確認テスト」を2回moodle上で実施した。2013年度はこの到達度確認テストも宿題と同様に自由な時間に実施できるような形式で扱ったが、より評価の質を高めるため、2014年度からは授業内に実施の時間を用意して行うこととした。

このほか、理科総合では「演習」として授業で学んだことがどのように医療の現場で利用されているか、応用問題を通じて学ぶための時間を設けている。この枠においては学生がお互いに問題を解いて教え合う時間を設けており、この保管にもmoodleを利用していくことが可能ではないかと考えられる。

2.3 必修：医療人間論

5月より開講する1年生の授業「医療人間論」では、近年では脳死や臓器移植といったテーマを利用してワールドカフェ形式でディスカッションを行わせ、そのまとめを小レポートの形式で提出させている。本授業は担当教員が複数おり、紙媒体やメール添付でのレポート提出では教員全体での供覧が困難であるため、moodle上のフォーラムを利用した提出形式へと変更を行っている。課題ではなくフォーラムを利用することで、学生同士が相互にレポートを閲覧し、自身の思考を深めることができるよう配慮を行っている。

2014年度では新しい試みとして、学生同士での相互評価をフォーラム上で実施可能とすることや、事前学習課題として動画等を視聴させ、授業時間でのディスカッションの質・量を高める反転授業形式の実施などを検討している。

2.4 選択：インストラクショナル・デザイン入門

2013年度より筆者の開講した選択授業である「インストラクショナル・デザイン入門」においてもmoodleを全面的に活用した。2013年度では、授業で利用した講義スライドのPDF配付やmoodle上での小テスト・フォーラムによる課題提出を行わせた。

小テストは理科総合とは異なり、総合成績に加味する形での必須形式とした。一方で授業後の復習を通じて知識を確実に身につけてもらうことを目的としたため、実施回数については無制限とし、最高得点を成績に用いることとした。

本授業は10人程度の小希望であったため、フォーラムでは自身の意見を投稿することと合わせ、他人の投稿に1つ以上コメントをつけることも課題として提示した。筆者も途中でコメントを返すこともあったが、moodle上では最終的な答えそのものを提示するのではなく、議論がさらに進むような投げかけを行う程度に止め、詳細な解説は授業時間を用いて実施するようにした。

また、本授業では出席代わりに質問・感想シートを毎回の授業終了時に5分程度で質問や感想を書かせ、次回の冒頭でその意見に対するコメントを返す形式をとっている。しかし、時間の都合で全ての意見に詳細なコメントを出すことができなかつたことも多かった。そこで本年度はコメントの一部のみを授業開始時に紹介し、残りはmoodle上で返答するような形をとるよう、検討を行っている。

3. 医療系分野におけるmoodleユーザコミュニティの提案

日本moodle協会（MAJ, Moodle Association Japan）では既に各地域における地方部会としてのユーザーコミュニティは運用がはじまっている。一方、例えば医療系コミュニティや英語学習コミュニティなど、各教員が扱っている授業分野に応じたコミュニティも必要になるだろう。

特に医療系においては掲載コンテンツの著作権処理など、各ユーザーが個々人の努力で対応を行っている部分もあり、こうした知見を共有することでmoodleの利用をさらに活性化することができるを考える。

また、例えば医学部においては文部科学省による「モデル・コア・カリキュラム」が策定されており、こうした指針となるカリキュラムに沿った教材作成および共有を行うための仕組みを作ることができれば、ICTによる教育の効率化を図ることが可能となる。

このような背景から、筆者はmoodle mootでの発表と合わせ、医療分野におけるmoodle利用者が連絡を取り合い、情報共有が可能となるようなコミュニティの立ち上げを提案した。この発表と合わせ自身のfacebook上でも賛同者を募ったところ、既に10名以上が興味を示している。現在、日本moodle協会のWeb上でも情報交換が可能となるようコミュニティの準備を進めているところである。